

緊急事態の遠隔授業体制下での教育実践（語学系）

太田 眞理

— 目 次 —

1. はじめに
2. 実際の教育実践
3. おわりに（今後に向けて）

キーワード：遠隔授業 英語 コミュニケーション

1. はじめに

中国の武漢に端を発した新型コロナウイルス感染症が日本全国に拡大を続ける中、4月14日に香川県は独自の緊急事態宣言を発令する。政府は4月16日に全国の都道府県に対して緊急事態宣言を拡大した。これを受けて本学では2週間の体調管理期間を設けた後、4月20日に授業を開始し、5月31日まではすべての授業を遠隔授業で実施することとした。

その後、感染拡大が一時的に終息に向かうかに見えた5月21日に、近畿3府県での緊急事態宣言が解除される。香川県も、「感染観察都道府県」に該当することになり、文科省が制定した『学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル』による〈レベル1〉、すなわち、教育活動を「十分な感染対策を行った上で、実施」するというカテゴリーに入った。このような香川県の状況を踏まえて、6月1日から一部の対面授業を開始することになった。すなわち、

OTA, Mari 四国学院大学総合教育研究センター教授、英文学専攻

履修者が100名を超える授業は遠隔授業を継続し、100名未満～50名以上の授業は、個別に授業内容を勘案して遠隔授業を継続するか対面授業を開始するか、両方を併用するかを決定する。また、履修者が50名未満の授業は、原則的に対面授業で行うこととなった。さらに、学習の利便性を勘案して、対面授業を開始した授業においても授業の必要に応じて遠隔授業方式（学内ポータルサイトや学内LMSなど）を積極的に活用することが学生と教員に求められた。

このような本学の要請を受けて、前学期における筆者の担当する授業は、4月20日より全面的に遠隔授業、いわゆるリモート授業を採用した。とはいえ、全面的な遠隔授業など、今まで経験もなく、すべてが手探り状態で行われることとなった。遠隔授業を行うために、適切と思われるさまざまな方法の中から筆者や学生が容易に操作可能なツールを選び、試行錯誤を繰り返しながらもこれに取り組み、なんとか前年まで行ってきた対面授業とくらべて講義内容の質的低下が起きないように努力した。以下はその教育実践の報告である。

4月20日に公開された末吉学長のメッセージ「緊急事態宣言に対する四国学院大学の対応と方針」には次のように述べられている。

遠隔授業は、もともと人と人との出会いを、単なる情報交換に留めることなく、精神と身体全体性のもとに捉えようとする本学の建学の精神からすれば、異なった形であることは、否めません。しかし、デジタル・ネイティブである多くの皆さんにとっては、あらたなネット社会の可能性をさぐるチャンスとなるかもしれません。

そして、「しばらくは、遠隔授業を通じて、思索と感性の錬磨に励まれることを切望いたします。」と言う言葉でメッセージが締めくくられている。

遠隔授業がはたして対面授業の代替策となりえたのか、それともオンラインでの授業が単なる対面授業の代替案であることに留まることなく、独自の有効な教授方法となる可能性はあったのか、使用したオンライン授業用ツールや遠隔授業方式（学内ポータルサイトや学内LMSなど）は学生や教員にとって有効に機能したのか、果たして学生たちは「遠隔授業を通じて、思索と感性の錬磨に励む」ことができたのかを実際の遠隔授業体制下での教育実践の報告によって検証する。

2. 実際の教育実践

本学における緊急事態の遠隔授業体制下での実際の教育実践（語学系）は次のようなものとなった。前学期における筆者の担当する授業は「教養教育カリキュラム」外国語科目より1コース週2回と「英語メジャー」専攻科目より3コース各週1回および卒業研究プロジェクト週1回の計5コース週6回である。オンライン授業ではすべての授業でZoomを使った同時双方向型授業とした。Zoomでのリアルタイム授業を補助するものとして学内ポータルサイト、Gmail、LINE等を使用し、ZoomセッションのID、パスワード、リンクを一斉配信するとともに、メール添付によりテキスト、プリント、授業資料となるWebサイトのリンク等を配信した。課題に対する筆者からのフィードバックや学生からの質問や意見などもGmailを通じてやり取りした。6月1日から本学の要請に応じて、全てのコース（卒業研究プロジェクト以外）を対面授業に移行するまでの約6週間、適宜必要と思われる資料やツールを採用して、前年まで実施していた対面授業と遜色なく学ぶことができるように工夫したつもりである。以下はその教育実践の報告である。

○英語Ⅰ（2）（1年生、週2回）履修者20名

この講義は1年生を対象にしており、中高で身につけた英語の基礎知識を土台として、実際に英語でコミュニケーションを実践する授業である。クラス内では原則英語のみの使用が要求され、テキスト、ワーク、提出物も全て英語である。

30回の講義のうち、はじめの12回がZoomによる遠隔授業となった。教師も学生も初めてのZoom体験となったが、初回からはほぼ全員が参加でき、幸いにも数回で対面授業とあまり変わらない授業内容がこなせるようになった。はじめは顔を出すのを恥ずかしがり、英語が口から出てこない学生も三分の一ほど見受けられたが、すぐにグループワークにも取り組めるようになる。13回目からは対面授業となるが、座席はコロナ感染後の追跡調査用に学校側が予め決めた座席表に基づき固定された。左右では間に空席を設け、前後にも空席を設けたため、前から見るとジグザグ模様である。教室内の授業中における学生の移動は禁止された。対面式授業に移行してからも、Zoomで顔馴染みとなっていたため、違和感なく

授業がすすめられた。ただし、座席が指定され身動きがとれなかったため、対面授業でのペアワークやグループワークでのメンバーが固定され、変化や面白みに欠けたものとなった。

この科目では、英語が得意な学生だけでなく、苦手意識があつてなかなか学習効果の上まらない学生にも、英語学習に興味と熱意を持ってもらえるように工夫している。そのために、学生との密なコミュニケーションは必須である。授業ではゲーム感覚で楽しみながら繰り返し練習できるアクティビティを多く実施している。また、ペアワーク、グループワークを通して、能動的に英語を使う機会を多くしている。さらに、身振り手振りを入れたチャントや歌で、よく使う表現や覚えにくい単語を楽しく学習する工夫をしている。このように、歌、ゲーム、クイズなど、楽しみながら身につくアクティビティを多く活用する授業であるため、遠隔授業においてこれらのアクティビティをいかに実践するかが課題となった。

このコースは4名の英語ネイティブの教師と3名の日本人教師が担当し、二つのレベルに分け、二種類のテキストを使用した。4名のネイティブの教師のうち、2020年度は3名の新人講師を迎えることになり、教師間で相談のうえ、Zoomを使って同時双方型のレッスンを実施することを決定する。担当教員全員Zoomを使うのははじめてであったため、教員同士でZoomによる会議を重ね、いろいろなファンクションを試してみる。例えば、パソコンとスマートフォンでの違い、あるいは個々のWi-Fi環境などの様々な状態を実際に体験して検証した。筆者は四国学院で過去20年間このコースを担当してきたが、これほど教員同士が密に情報を交換したことはいまだかつてなかった。直面する問題を協力し合って取り組むことで人間関係も密になり、困ったときお互いに助け合う下地ができた。

新入生対象のコースであり、学生がZoomにアクセスできるように、招待のリンクやID、パスワードの周知が第一の関門であった。Zoomにはパソコンで参加することを原則とした。スマートフォンでは使えるZoomの機能も限られてくることと、将来を見据えて学生にパソコンのキーボードでのタイプを習得させるためである。またマスクを着用したままの参加は減点の対象となることとした。実際には学生が顔を出してZoomセッションに参加することにほとんど抵抗が無かったのは驚きであった。ただし、外出制限によってパソコン及び周辺のアクセサリが購入できない学生、あるいはインターネット回線の契約後の設置を待たされた

学生も数名いたため、その間はスマートフォンによる参加も許可した。

外国語、特に英語圏の国々ではパソコンのワープロソフトを使ったレポートの提出は大学では常識であり、社会でもWordやExcelが使えることは絶対必要条件となっている。またインターネットのサイトを使った教材、デジタルテキストの普及がすすんでいる。音声ダウンロードするテキストも多い。本校が採用している共通のテキストも、音声やビデオのダウンロード、ネット上での復習ドリルなどが含まれているが、昨年まではほとんどの学生が使えていなかった。本年は全員に音声のダウンロードを義務付け、聞き取りを前提とした宿題を課題とした。

○英語のことばと文化（3年生、4年生 週1回）履修者17名

この講義では、英語圏の国々（本年度はイギリス）の現在の社会背景をもとに、ことばと文化の特徴を短くまとめた英文のエッセイを読み、日本文化との違いや、歴史的な変遷や、最近の急激な変化や問題点を簡単な英語でディスカッションした。

15回の講義のうち、はじめの6回がZoomによる遠隔授業となる。ほぼ全ての説明を英語で行い、学生の提出物も英語で行っている。不明な点があれば、放課後、あるいはE-mailなどで対応している。

筆者は前述の英語Ⅰを含め、全てのコースにおける履修生への連絡は以前から本学で使われていたポータルサイトを使ってメールで一斉送信したが、毎回の夥しい数となる提出物や配布物に関しては、汎用性があり使い勝手の良いGmailを使うことにした。しかし実際のところGmailに精通しているとはいえなかった。以前にGmailを使ったときには、それぞれのクラスに違うアカウントを作ったが、作ったアカウントは使用しなくても永遠に残ってしまうため、今回は一つのアカウントを使い、ラベリングという機能を使って、クラス毎に自動仕分けできる方法を採用した。基本のアカウント名と@の間に決まった文字を挿入する方式である。

○○○○○○○+△△△△△@gmail.com

○の部分が基本のIDで、+と△の部分がラベリングに使われる部分となる。例えば筆者はs=四国学院大学、20=2020年、a=前期、m=月曜、2=2限目、とした。

〇〇〇〇〇+s20am2@gmail.com

これは、《四国学院大学2020年前期月曜2限目》の授業のアドレスを意味する。毎週数百通の添付ファイル付きのe-mailを受け取る筆者にとって、この機能は非常に助かった。LMSに精通しておれば、これ以上に便利だったかもしれないが、緊急事態の対処としては自分のもっているスキルと汎用性のあるツールを最大限に活かせたと考えている。ただし、スレッドになって隠れていた受信メールを見落とし、催促のメールを出して、学生から苦情を受けたこともある。はじめの一週間ほどは、学生も筆者も慣れるのに苦労したが、これは致し方がなかった。

○英語読解術入門（2年生、3年生、週1回）履修者23名

この講義では、英語を翻訳するように精読するのではなく、書かれた語順通りに前から後ろに読んで理解する訓練を行うことにより、英語を英語の語順のまま理解するスキルを身につけることを目的とする。ネイティブがそうしているように英語を英語のまま読んで理解するには、学生個々のレベルに応じた、また先を読みたいと思わせる内容の本を選ぶ必要があると考えた。ほぼすべての説明、毎週のリーディングレポート、プレゼンテーション、ディスカッションを英語で実施している。事前にメール添付でリーディングレポートを提出してもらい、大きな間違いを指摘してからプレゼンテーションに臨むように指示している。また、クラスメートのプレゼンテーションへの短い感想も全員に書いて提出させることにより、注意深く他者の発言を聴くと同時に、自分のプレゼンテーションを客観的に評価して改善するヒントになればと考えている。

15回の講義のうち、はじめの6回がZoomによる遠隔授業となる。リーディングのクラスでは、遠隔授業になったためにe-bookを使うことを余儀なくされた。通常であれば、同じレベルのものを十数冊ずつ用意した10段階程度の本の中から一冊を毎週学生に選ばせ、次の授業時に理解度を試すクイズをして自己採点してから、宿題として書いてきたリーディングレポートを全員の前でプレゼンテーションし、他の学生がそれに対する短いコメントを書く。クイズ用紙、リーディングレポート、他の学生へのコメントの三枚のシートをクリアファイルに毎週足していき、次の週に読む新しい本を選ぶ。これらの一連のアクティビティが通常の手順と考えていた。幸いなことにオックスフォード社がOxford Learner's B

ookshelfというサイトを無料で提供してくれ、学生は登録するだけで、150冊近い本の中から好きな本を好きなだけ読むことができた。そのサイトは当初6月末までが無料提供の期限であったが、8月末まで延長され、前期は全てこのサイトを使うことができた。しかし、学生が選択する本の種類が増えたため、全てに対応したクイズを筆者が用意できなかったこと、またそれぞれの学生に違うクイズを間違いなく提供することが遠隔授業では不可能になったこともあり、リーディングレポートの内容が評価に占める割合が大きくなったため、毎回送られてくるリーディングレポートのチェックがかなり大変であった。学生は締め切りギリギリに一斉に送ってくる場合が多く、遅れて提出するものも少なくなかった。筆者は期限を厳しくして脱落者を増やすより、遅れてでも毎週一冊読み終え、リーディングレポートを書き、プレゼンテーションを行うことの方を重視したため、遅れた学生も受け入れた。そのため授業の前日、前々日にはレポートのチェックとレスポンスにかなりの労力と時間を費やした。今後はクラスマネジメントとクイズが一体になったe-bookのコースの導入を模索している。e-bookの利点はなんといっても音声がついてくることである。速度も何段階かに変えることができる。しかも有料のe-bookコースとなれば、クイズは自動採点され、クラス管理が容易である、というように学生と教師の両方にメリットがある。クイズの正解率や読んだ本の冊数、レベルによってメダルが増えていくという、モチベーションを保つ工夫もされているようである。無料の場合は、クイズに挑戦はできても解答がなく、採点もされず、クラスマネジメントもできなかった。今後はe-bookを使って、テキスト一冊分の費用程度で賄えるコースを探すか、自分で組み上げる計画をしている。

○英語聴解実践（2年生、3年生、4年生、週1回）履修者18名

この講義では、ゲーム感覚で楽しみながら繰り返し練習できるアクティビティが多いテキストを使い、ペアワーク、グループワークを通して、能動的に英語を使う機会を多くして、聴き取ったことをすぐ実践に移し、反復練習をして身につけることを目的としている。

15回の講義のうち、はじめの6回がZoomによる遠隔授業となる。Zoomでの遠隔授業では全員マイクをオフにして、当てられた学生だけしか発言できず、クラ

ス全体の反復練習時の音声聞き取れないため、発音指導に苦労した。テキストにリスニングの課題に出てきた語彙を中心にしたクロスワードパズルやゲームが沢山あったため、宿題として課題の答えを添付ファイルで毎週提出してもらった。

このリスニングのクラスでは、クラス内で行う演習が中心のテキストの他に、インターネット上にあるEnglish Centralという無料のサイトで自由に短いリスニングのマテリアルを選ばせ、リスニングレポートという形で提出してもらった。中には週に3個選びレポートを提出する熱心な学生もいた。

このように、Webサイトを有効に利用すれば、使っているテキストだけでなく、学生のレベル、興味、意欲に応じた様々な教材を提供できるということがわかった。これは遠隔授業開始により、インターネットの利用が増えたために気づいたことであるが、平常時でも使えると思う。教師は常にアンテナを張り巡らし、世の中にある新しいメソッドを試してみるべきだと感じた。例えば英語で繰り広げられるコンピューターゲーム、英語に翻訳された数々の日本アニメやコミックなどで英語を学ぶといった、本来教育とは無縁なコンテンツを利用する方法も検討の余地がある。

○英語文学入門（3年生、4年生、週1回）履修者28名

この講義では、比較的容易に理解でき、しかも子供時代に触れたことのある寓話、童話から始まり、短くて若者に印象深い詩や短編を紹介する英米文学の入門書を使って、簡単な文学用語、手法、ジャンルに馴染んでもらう目的のコースである。できるだけ説明にも英語を使い、文字による意味だけでなく、音声からのイメージも経験してもらおうと努力している。特に詩に関しては、インターネット上にある様々な朗読を聴き比べ、感情の込め方を変えるとどんな違いがあるかを体感してもらおう。またおとぎ話の呪文などを暗証して、子供たちがどんなふうに関心をもち、作品を音から楽しんでいるかを味わってみる。

15回の講義のうち、はじめの6回がZoomによる遠隔授業となった。しかし受講者が28名ということもあり、Zoomの画面も2ページに別れ、クラス全員の様子を把握するのが難しく、全員に満遍なく対応することができなかったのではないかと考えている。外国語で文学を鑑賞するということは非常に難しく、特にユーモアや言葉遊びなどはなかなかその面白さを理解してもらうのには苦労するとこ

ろである。しかし、古い作品であっても学生の心に深く残るものがあり、一生忘れないような作品との出会いとなればこれ以上嬉しいことはない。また作品を通して、人はそれぞれ捉え方や感じ方が違うということをお互いに知ることは非常に面白い経験になるはずである。正しいとか間違っているとかではなく、それを自分はどうか捉えたか、また時代や地域によってそれはどのように違って捉えられたか、そしてなぜそうなったのか、ということを手づかみ興味を持って深く考えたり調べたりしてもらいたいと考えている。遠隔授業を通してインターネットの利用が増え、学生は各々翻訳や時代背景、同じ作家の他の作品などに目を通したようである。文学に関しては、筆者は対訳も大いに結構だと考えている。インターネット上ではアニメになった作品、イメージを写真や絵画にしたもの、掲示板（BBS）スレッドがあるもの、と多種多様なマテリアルが存在する。そういったものを利用して、文学をより身近に感じてもらいたいと考えている。

○卒業研究プロジェクト（4年生、週1回）履修者1名

この講義では、学生がテーマを決め、それにふさわしいマテリアルや手法を駆使して、最終的には英語の総合力の向上を目指すことを目的としている。

筆者は本年度1名の受講者であったため、指導は全てZoomのセッションで行っている。学生は母親が好きで全シリーズ集めていたアメリカの若者用のドラマ（1エピソードにつき20分）を週に1、2回のエピソードずつ視聴して、各エピソードのプロットと感想を英語で書き、添付ファイルで送ってくることを課題とした。ビデオはまず英語、次に日本語字幕、そして英語字幕、最後にまた英語、と少なくとも4回は視聴して、随時ビデオを止めて知らない単語や表現をノートに綴り、それを写真に撮り添付ファイルで送って来ることも指示した。また、この学生は本人の意志で週に数回フィリピン人講師とのマン・ツー・マンのビデオ会話も7月から始めた。筆者とは週に1回Zoomによるセッションを行い、画面共有で送ってきたレポートを音読してもらい、文法や表現などの間違いがあれば指摘して、書き直してもらっている。簡単な文法やスペルミスならば、ほとんど自分で気付くようになった。また、スラングなどは辞書になくても、インターネットを駆使して自分で調べるスキルが身についてきた。筆者はそのビデオを購入したが、学生より先には見ないようにして、学生の書いたものがストーリーを全く知らない

読者に正確に伝わるかどうか試している。毎回のセッションは約1時間程度で、全て原則英語である。フィリピン人講師とのレッスンが進むにつれ、思わず日本語で返ってきていた返答も、自然に英語でできるようになってきていると感じている。このコースについては、受講者が1名ということもあって、Zoomによる同時双方型授業は理想的である。夏休み期間中でも問題なく続けられている。

○全般として

語学の授業といっても初習外国語と既習外国語、教養課程と専門課程のコースと様々である。2020年度前期に、筆者は既習外国語の英語担当であり、教養課程のコミュニケーション重視のコースと専門課程の英語のことばと文化、英語読解術入門、英語聴解実践、英語文学入門、卒業プロジェクトという様々なコースを担当した。いずれのコースも英語による「コミュニケーション能力」の向上を目指したものであるという大前提があり、どのコースも教員から学生への一方向講義形式による授業は不可能であることから、双方向のコンタクトが可能であるZoomの採用が不可欠であると判断した。ちなみに筆者の担当コースは、卒業プロジェクトが1名だった以外は、17名以上、28名までであり、平均20名前後であった。

今までSkype、LINE、Facetimeなどで国内はもとより、外国の家族、友人たちと1対1、あるいは3人までのグループで話をした経験は多くあったが、それ以上の人数での経験は皆無であった。まずはZoomが40分までは無料であったことから、インストールして家族と友人で試してみた。その後英語担当と有志の教員で7～8名のグループを作り、会議を重ねることにより、より複雑なファクションの使い方を試し、情報を共有した。その際に不可欠であったのが、メーリングリストによる予定やID、パスワードの周知であった。実際にZoom会議の最中に不具合が起こり、入れなくなって困っている時に大活躍したのが携帯電話によるLINEのグループ機能であった。Zoomをパソコンで使っている最中はメールをチェックすることがほとんどなく、メンバーに連絡が取れない場合でも、LINEのメッセージでは気づいてもらえた。このLINEのグループ機能は、その後の授業中における緊急事態でも大いに役にたつことになった。7～8名のグループでは、手が空いているメンバーがいれば緊急の質問に即答してもらえたほか、経験したトラブルをすぐさま共有することにより、同じトラブルを避けることができた。

また、3名の英語ネイティブの教師は四国学院での仕事は本年度が初めてであり、学校のポータルサイトの使い方をはじめ、平常時とは比べ物にならない多くの周知事項を共有できたのは幸いだった。

次に、今まで経験したことのないオンラインでの同時双方向型授業の中でさまざまな問題に直面し、その都度試行錯誤を繰り返しながら解決していったのであるが、それらの顛末をランダムに取り上げてみたい。今後の課題として残された問題や、最初は授業の支障と思われた事柄が意外にもメリットとして浮かび上がったことなど、思わぬ成果があったこともここに報告する。

授業の途中で何らかのエラーで音声やビデオの機能が使えなくなった時は、その都度最良の代替手段を学生とともに模索した。学生の発案で、LINEのグループを作って、そこで情報を逐次シェアして、授業の後半を無事乗り切ったこともある。日本の大学生はほぼ全員LINEのアカウントを持っており、Zoomの授業時に緊急連絡があれば、クラス内で繋がっていれば簡単に連絡を取ることができた。回線の不具合等で落ちてしまった時、クラスメートを通してZoomのチャットに知らせを送ってよこした学生も多かった。このように、常に複数の連絡手段を備えておくということがどれほど役に立ったかは言葉に表せない程である。例えばGmailで受け渡しできなかったファイルが、LINEでは可能であったこともある。予測のできない問題が起こったときにも、諦めずにその時できる最良の手段を使ってできることをやるという柔軟な対応が必要だった。そういう問題を数多く経験して、代替手段を複数使った経験があると、少々の不具合に慌てることなく対処できた。

一斉配信機能についていえば、Zoomのセッションのお知らせを大学のポータルサイトからメール配信しておき、セッションの30分から1時間前に再度Gmailの一斉配信で知らせることにより、出席率がとても高くなった。このように、大学のポータルサイト、LMS、Gmailなどの一斉送信は連絡するには欠かせないツールである。しかし、課題を受け取ったレスポンスには一斉配信は取って替えず、手間がかかって大変だったが、ひとりひとりに受け取った確認の返信と大きな間違いや改良点を逐一英語で返答した。手間と時間がかかったが、そうすることにより、課題の提出率や内容の充実度が格段に上がり、また教師と個々の学生との結びつきが強まったと感じた。17人から多くとも28人までのクラス規模であ

るから可能であったと思う。

Zoomによる遠隔授業では、筆者のデスクトップをシェアして、学生をギャラリー画面で表示することにより、対面授業よりお互いの顔を見合って発言する機会が増えた。対面授業では、どうしても教師対学生となってしまうが、ギャラリー画面では、輪になって全員見渡せる状態で座っているのと同等の位置関係になり、教室ではありがちな、居眠りや「スマホで遊ぶ」ということもクラスメートに見られているという衆人環視の状況ではほとんど起こらなかった。大人しくシャイな学生と、積極的でよく発言する学生の両方を、ほぼ同じように目にする事になり、普段よりも満遍なく学生に注意を向けることができたように思う。

ワープロソフトWordを使つてのレポート提出と、タイプで打つての小テスト解答を原則としたが、小テストではタイプのスピードが遅くて間に合わないという学生のため、手書きの答えを携帯で写真に写しe-mailの添付ファイルで返信することも許可した。4月20日に遠隔授業が始まった時、パソコンを用意すること、英文タイプができない学生はインターネット上にあるタイピングゲームなどを使ってできるだけ早くタッチタイプをマスターするよう周知したが、各クラスともに数名は最後までタイプが打てない学生が見受けられた。パソコンを5月になってやっと手に入れた学生や、とても古いバージョンの家族のパソコンを使っている学生もいた。今後は大学入学時に各自ノートパソコンとネット環境が整っていることを当たり前でできないものかと考えている。「今や大学生にとってパソコンを手に入れネット環境を整えることは、小学校に上がる新入生にとって筆箱と文房具を用意するようなもの」と、学生に言ってきたが、先進諸国では、それが15年以上も前から当たり前（国によっては20年以上も前）であったことを考えれば、決して無理難題を押し付けているとは思えない。添付ファイルを送って来るときに、メール本文に正確な英文メールの書式で書いてくる熱心な学生もいた。これらの学生は必要に迫られて、英文のe-mailライティング書式を自然にマスターするという副次的効果も獲得した。

3. おわりに（今後に向けて）

今回のコロナ禍による遠隔授業の最大のメリットは、知ってはいたが一步踏み出せなかった新しいツールを実践できたことと、すでに使用していたツールの新しいファンクションの発見であった。ZoomというWeb会議システムの利用と、学内に整備されているポータルサイトや学内LMSなどの活用、またSkypeやYouTube動画配信、LINEやFacebookなどのSNSやGmailといったコミュニケーションツールの新たなファンクションの発見などである。この度の経験によって、これらのコミュニケーションツールを授業に導入して活用するスキルを共有し向上させることができた。

リモート授業と言えば、以前からSkypeやZoomを利用した外国語会話習得コースが知られている。価格的にも人件費の安価なフィリピン人教師による遠隔のマンツーマン・レッスンが手頃な価格で受けられるようになっている。今回はじめて真剣に無料レッスンを受けて4社を調べてみた。思ったよりも教材が充実しており、安価なのに驚いた。超初心者からほぼネイティブレベルまでの様々なレベルとニーズに対応していた。日本の学生に一番欠けているのは、実際に英語を使ってみる経験であると常々考えていたため、これはとてもよいオプションではないかと考えている。実際4年生に卒業プロジェクトの一貫として薦めてみたところ、受け持ちの学生が自らの意思で契約をしてレッスンを受け始めた。筆者との毎週の面接はほぼ全て英語ですが、学生の英語でのレスポンスがスムーズになったと感じている。このような同時双方向型のオンラインツールを使った外国語習得プログラムを提供する講座はリモート授業の中でも最も成功した一例であろう。しかしそれは、大学における総合的な教育・研究を目指す授業とは異なり、ただ外国語の会話スキル習得という一点に特化したものであることを指摘しておきたい。

本学の建学の精神にもあるように、本来「学び」という行為は、人と人が出会い、心を通して触れあい、単なる情報交換や情報の収集、知識の収集にとどめることなく、——言い換えるならば、精神と身体を分節して精神面を優先して知と技術を詰め込むのではなく——人間存在を精神と身体の全体性のもとに捉えることが重要なことは言うまでもないことである。このことを実現するためには教師

と学生、あるいは学生同士が生身の人間として出会い、心を通わせることが不可欠である。ライブハウスでのライブセッション、舞台演劇、コンサートホールでのオーケストラの生演奏、競技場でのスポーツ観戦など、演者と観客が「いま、ここ」という時間と空間を共有することによって、グループダイナミックスともいえる化学反応が起こり、演者と観客の行為者と受容者という一方向性が変容し、双方向的に影響を与え、両者がさらなる高みに上昇していくという経験を私たちは知っている。長年の教師生活の中で筆者は、対面授業における教師と学生にもこれと同様のことが起こっていると、ずっと感じてきた。同時双方向型のオンラインツールを使った外国語習得プログラムのような授業だけでは大学教育は成立し得ない。キャンパスライフというリアルの生活の場において知と人間性は検証されなければならない。今回の遠隔授業体制下での授業を経験したことによって本学の言うところの「身体性」の重要性の再確認とともに、オンライン授業が使い方次第では非常に有効な教育手段であることも確認することができた。今後に向けて両者を統合する方策をさらに検討して授業の質を高めていき、学生が本学において思索と感性の錬磨に励むための一助としたい。

了